

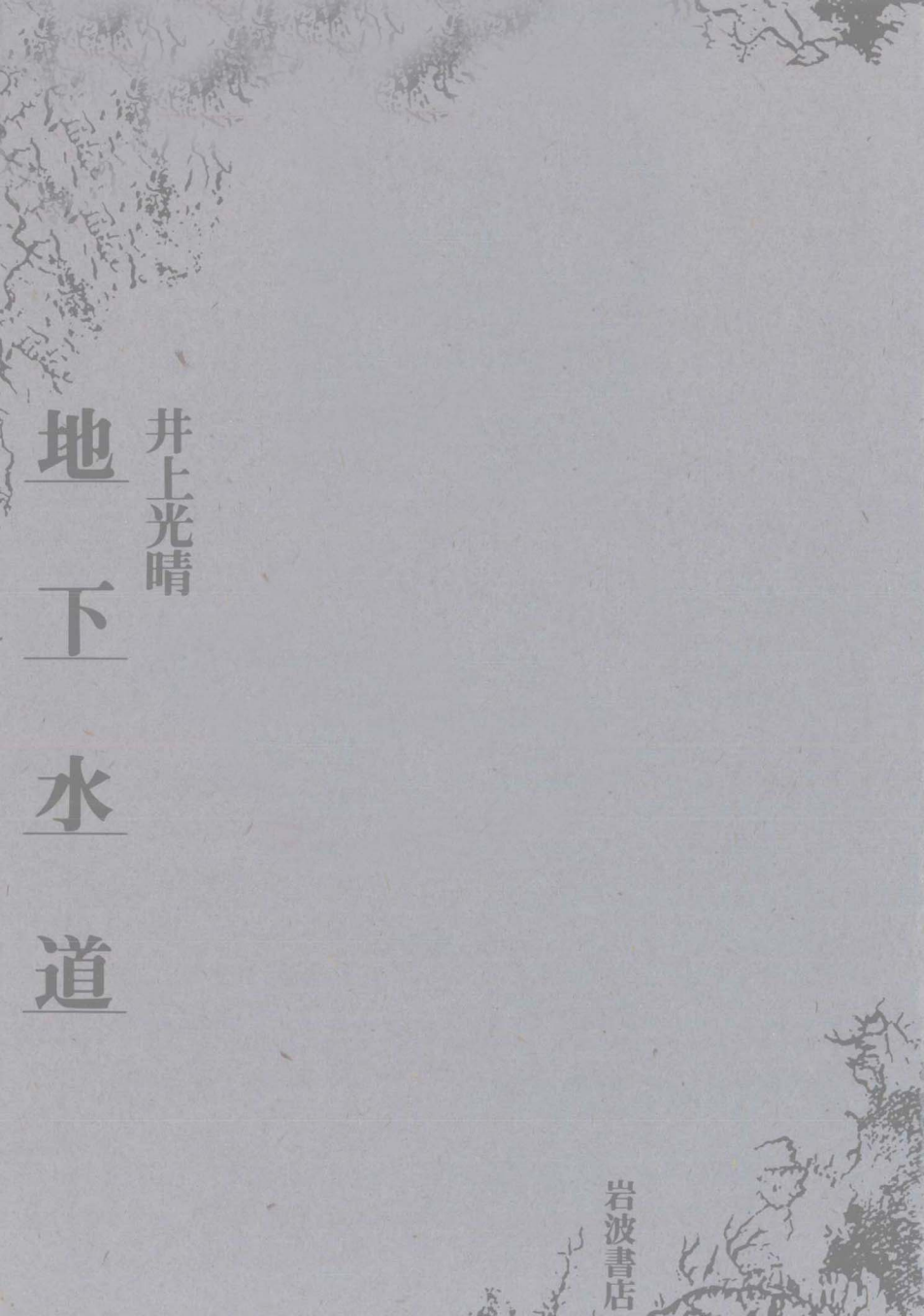
地

下

水

道

井上光晴



井上光晴

地
下
水
道

岩波書店

地下水道

一九八七年八月二十四日 第一刷発行 ©

定価一五〇〇円

著 者 井 上 光 晴

発 行 者 緑 川 亨

発 行 所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目
鉄 道 岩 波 書 店

電話 (三二六) 四二二
振替 東京六二六二四

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-001354-8

地下水道

むきだしの鉄柱に支えられたコンクリートの階段を降りてくる男たちの肩は、それぞれ白いものに被われていた。完成すれば恐らく、地下二階のレストランか売店になると思われる工事現場の一隅には、持込まれた石油ストーブを中心にして、すでに幾人かの先着者が陣取っており、午前零時という約束の時間まであと七分か八分位しか残っていないかった。

浴室のシャワー器具に似た恰好でぶら下がる二本の携帯用電灯と、使途不明の四角な木製の枠に立てかけられた自転車用光線の交わる、薄暗い舞台照明のような明かりに浮出された配線の色はまるでクレパスだ。

そのクレパスに飾られた酸漿や薔薇の乾燥花は、今宵新嫁になる娘のきわだつ特技でもあったのだが、虫の羽かと思まがう透きとおる黄色い紙切れを、ちぢり合わせる花びらの異様な気配もまた、少女の内面に通じるといつてもよかった。

またひとり、木壁の傍でコートの雪を振払う男に番匠新時は視線を投じた。みるからに首の細い

青年で、（下宿人という題の小説をもう二年も前から書きつづけていた。実際、その原稿を読んだ仲間は、鳥の名前を渾名にした住居者と、下宿を経営しながら自身は屋根裏部屋に住む老女との葛藤を物語にしたものだといひ、テントという渾名の女は、酔払うたびに、ノーマン・メイラーの盗作だと喚びていた。花嫁と新郎を除いて、林檎箱にしつらえられた七本のミネラル・ウォーターと七本のホワイト・サントリーは、そのまま地下の宴席に集う人数をあらわしていたが、今ひとりの段になって、時計はついに、定刻を過ぎた。

「ひとり分だけ遅刻だけでも、始めようか」

「分だけというのはおかしいんじゃない」

どういふ加減か、一本の電灯が揺れると、白いセーターを着た花嫁の姿は一瞬すっぽりと闇に包まれ、左右に影を散らしながら、やがて少しずつ元に戻った。十七歳になったばかりの少女は、普段と同じくあまり口をきかなかったが、やや濃い目にひかれた薄い唇の朱は、息づくたびにあふれるような心情を湛えていた。

「4-2の奴、すっぱかすつもりじゃあんめえな」今きたばかりの青年はわざとらしく語尾をひねった。名前は水城豊。4-2とは競輪狂いの渾名で、それ以外の連勝に決して賭けないところからそう呼ばれていた。

「辛えんだよな。4-2だって」これも通称の蓮根はいふ。

「安っぽいこと、いわない約束じゃなかったのかい」原体験はいう。「素朴で厳肅。いたずらな感傷に流れさせないこと。今夜のスローガンだよ、それが……」

「先廻りしないでくれよ」蓮根はいう。「妙ちきりんに先廻りされると、かえっておかしな気分になっちゃうからさ」

「何だっていいじゃない。思ってること何だってじゃんじゃんいえばいいのよ。そのために集まったんだろう」テントはもうはなから荒れたい気分である。〈下宿人〉の作者に惚れているくせに、朝来五一とどうにかなるのは自分だとひとり決めていたのだ。その朝来五一こそ、金城花江の星を奪い得た二十歳の青年であった。

遊園地のジャングルそっくりの枠組みを背に、ストレートのウイスキーを紙コップであおった後、番匠新時は金城花江と最初に出会った日のことを考えていた。

六月、原宿駅前にある雨煙りに包まれた陸橋を、ゆっくりと渡ってくる少女にレストランの庇に身を寄せた人々の眼は、一斉に注がれていた。

「気障ったらしいわね、あの人。胸に抱えてるの、人形でしよう」

「知らないのか、金城花江っていうんだよ、あれ。この辺に最頂のレストランが何軒もあってさ、彼女がテーブルに坐るとちゃんとしたものをだす仕組みになってるんだ。自分でこしらえた人形を、そういう店にお礼に持ってくっていうんだけどね」

「劇画みたいな話ね、なんだか」

「いかれてんでしよう、あの人。そうじゃないの。でなかったら気障だわ、矢張り」

「ずぶ濡れよ。あんな歩き方じゃ。どう仕様もないわね」

「案外意識してんじゃないのかしら。見られていること、ちゃんとわかってるって感じ」

「お前じゃねえよ」

「あら、大胆」

「誰か人を探しているみたい。デイトの約束でもしたのかしら」

「そんなのいるもんか。親衛隊がいてさ、手なんかだせっこないんだよ」

「口惜しいっていう声をだすじゃない」

ふつくらとした白い頬に垂れた断髪が近づくにつれて、自分をモデルにしたと思われる程、少女の容貌は胸に抱く人形の印象に似ていた。

それから一ヵ月ばかり経った日の夕暮れ、彼は思わぬ場所で金城花江を見た。新しく建てられようとする高層ビルの基礎工事に設置された機材倉庫の裏手にぼつんとしゃがんでいたのである。幾つかの漏斗様に掘られた斜面と斜面の合間にできた筋道に。彼は自転車のハンドブレーキを握りしめるとそつと声をかけた。

「危いよ、そこ」

手招きに応じて、金城花江は素直に腰を上げ、物慣れた平均台でも跳躍するような足どりで彼の傍に立った。

「落ちたらどうするんだい。とてもじゃないけど、這い上がれないよ」

こつくりとする金城花江を手招きして、番匠新時はブルトナーのステップに並んで坐った。

「人形可愛いね。君が作ったの」

金城花江は大きく頭を振る。

「そうじゃないのかい。君が作るんだって、そうきいていたけどね」

「姉さんの人形よ。毎日、病院で作ってるわ」金城花江の口から、はつきりそういう言葉がでた。

「そうか、姉さんが作ったのか」

金城花江は丁寧すぎる動作で、深々と頷く。

「上手なんだね、とても」

「顔も自分で作るの。買うんだったらいろんなもの売ってるけど、それじゃつまらないし、みんな自分で工夫します。靴もそうだわ。欲しいっていう人が多いからベッドでずっと起きてるんだけど、看護婦だって大目にみてる位」

「似てるんだね、君に」

「姉の方がずっと似てるわ」

「生きてるみたいだな。鏡だよ、まるで」

言葉を選ぶのを苦痛に感じたのか、金城花江はついと立ち上がると自転車のサドルに手をおいた。「乗れるのかい。乗りたければ乗ってもいいよ」

ずぶ濡れの陸橋を歩くのと同じように、金城花江の自転車はゆっくりと走りだし、まるでそれ以上のスピードを制限されてでもいるかのように、ブルトーーザーを一巡してもペダルを踏む足どりは変らず、よろめきながら駐車場のトラックを目差した。

午前零時二十分。4・2はもうぼいしちやおう、と誰かがいいだして、こういう場合必ず舞台廻わしを務める蓮根が喋り始めたが、もうひとつ弾みのつかぬ気分にないなまれるような口調であった。

「……とにかく正式の結婚式なんだからさ、今日から金城花江は正式に朝来五一の女房になるんだ。形式なんかどうだっていいけど、そのことを皆で確認したらいいんじゃないか。二人の前途を祝って乾杯しよう。江副、やってくれよ」

一見帽子でもかぶったような、灰色の髪を毛ばだてた男は紙コップにミネラル・ウォーターを注ぎ足し、「それじゃ水盃になっちゃうよ」と、テントが悪態を吐いた。

「花江、おめでとう。それから朝来、おめでとう」原体験と呼ばれる男はいった。

「それからはないだろう」と、朝来五一。

「朝来の天才にはシャッポを脱ぐしかない。これまで誰にもOKしなかった花江がお前に陥落したんだからな。花江を独占できる男があらわれるなんて考えてもいなかった。そこを見事に突かれた。今、蓮根が宣言したように、花江は朝来の、正式の女房になったが、これからもずっとわれわれ地下生活者たちのアイドルであることに変わりはない。朝来、花江を泣かしたら承知しないぞ、乾杯。……」

「ありがとう」と新郎はいい、花嫁は心持ち首を左右に振った。

「じゃ順番にやろうか、水城からどうだい」と、蓮根が促がす。

「順番なんかご免だね。喋りたい奴が勝手に喋ればいいのさ」テントはいった。初村朱実。ある時期、医大附属病院の看護婦だったというのが皆の知る経歴である。

「話そうと思っていたんだ、ちょうど」水城豊はいう。「このパーティを最後に、おれは皆と別れるつもりだ。あんたらの目の届くところにおれはもういない。……」

テントがひゅうと口笛を吹き鳴らして、「恰好いい」と、合の手を入れた。

「ずっと考えていたんだ。集団の虚構が成立するのかどうか。みんなとの生活は楽しかったし、随分大きな意味を持っていたと思うけど、どうしてもそこから甘えがでてくる。だからおれはひとりっきりでやりたい。朝来と花江の新しい出発を踏み台にしてわるいけど、これもチャンスだと思っただよ。それだけ……」

初村朱実ひとりだけの拍手が錯綜するクレパスの配線を伝わるかのように響き渡り、ちぐはぐな氷が一片ずつ皆の紙コップに浮いた。

「集団の虚構は成立しないが、ひとりなら成立するっていうのかい」江副仁はいった。「地下生活者の意味をいちばん強く主張していたのは君だぜ」

「下宿人」を書き上げたんだよ、きつと、この人。だから自分だけいい子になろうっていう寸法さ」「そんなエゴイストじゃないよ。下宿人はまだ完成していない」

「エゴイストでなければ何さ。花江を寝盗られたのがそんなに口惜しいのかい」

「止めないか、テント」江副仁は制した。「仲間を脱けだすのは勝手だが、もう少し納得行くように説明してくれないか」

「説明なんて要らないよ。出て行きたい奴は出て行けばいいんだ。それで終わりさ。集団の虚構なんて、ちゃんちゃらおかしいよ。一体そんなものがどこにあるんだい。地下生活者なんて言葉だけのマスターベーションじゃないか。さあ、ぐずぐずしてないで出て行きなよ、さつさと」

「パーティが終わったらね」

「パーティが何だっていうんだよ。正式の結婚式がきいてあきれよ、どこに正式の書類があるんだい。名前も経歴も、生れた場所だって、何ひとつ事実を明かさない。そういう約束なんだよ。雌と雄がくつつくの、いちいちどんな正式の手続きがあるっていうの。ナンセンス」

「ピッチが早すぎたんだな、こいつ」蓮根はいう。「ひとりになりたいっていう、水城の理由を、もう少しきこうじゃないか」

「誰にも拘束されない、そういう虚構の中に自分をおきたいんだよ、本気で」

「ここじゃ偽物の虚構しか味わえないというわけね」おかしくもないのににやついている青木はいつた。自称三十九歳の男で、こいつが男娼の口真似をしだすと、話は必ずこじれるのだ。理屈なんかつけずに、黙って消えてしまえばいいんだよ。番匠新時は声を出さずに（下宿人）の作者に向っていう。明日の朝、おれがちょうどそうしたいと心を決めているように。

「ラルフ・エリスンに乾杯」

三十九歳の男は、かなり本格的な手口で水城豊をからかい始めた。

「どうしたんだい、みんな。新たな魂を躍動させつつ偽物の虚構者たちと訣別せんとする、真実のインブーヅブルマンを祝福しないのかい。ひよっとしたら花江ちゃんの進水式より重要な意味を持つているかもしれないぜ」

「インブーヅブルマンは止めようよ。この際イデオロギー問題は中止」司会者の役割を意識してか、蓮根が調停に入った。

「あたし達に飽きたからでて行こうっていうのは、イデオロギーじゃないの。偽物の虚構者との訣別だって。ふん、甘ったれるんじゃないよ」

「番匠、何かうまいスピーチやつてくれよ」

彼は紙コップに残ったウイスキーを咽喉に流すと、腰を上げて二人の方に真直ぐ体を向けた。

「金城花江をみんな愛している。おれもいちばん好きだった。だから朝来五一はみんなとおれの分まで花江さんを大事にしてくれ。新宿の地下を徘徊するラルフ・エリスン主義者と〈見えない人間〉の底知れぬ運命のために、深く頭を垂れて祈ろう。南無妙法蓮華経」

ドンドンという冗談を返したのは〈下宿人〉の作者であったが、片膝を立てて元の姿勢に戻った番匠新時の耳に、かすかな呟く声が届いた。そしてその低い影のような声は、ぶら下がった電灯の狭間を縫いながら、かすれた空気を貫いたのである。

「あたしもそう。番匠さんがいちばん好き。今でも……」

震えるような固い沈黙の破片が、皆の胸を捉え、蓮根はすべてをまぜこぜにしてしまうために高い声をだした。

「それらしくなってきたぜ、やつと。さあ、どうする、番匠君」

「折角、花嫁が告白したんだから答えなさいよ番匠さん」と、三十九歳の男。「進水式の、ワインはまだ割っちゃいないんだから、充分間に合いますよ」

「合格よ、あんた。さすがに金城大学だわ」テントは両腕をゆすりながらコマースシャルの文字をもじった。「青ざめちゃって、青ざめちゃって。折角の花嫁が青ざめちゃって」

「そんな意味じゃないよ。花江がいったのは」朝来五一はいう。「好きとか嫌いだとか、誰だってそういう感情はあるだろう。この人は普通のそんなつもりでいったんだ」

「青ざめちゃって、青ざめちゃって」

「花江の気持はわかってるさ」番匠新時はいった。「精一杯の友情だよ。花江とおれの間にはそれがあった。だからさつき、おれの分まで大事にしてくれて、そういったんだ」

「番匠君、きれいごとはやめましょうね」と、初村朱実。「花嫁さんの折角のご好意を無にしちゃいけないわ」

「悪い冗談はあきまへんで、みんな……」原体験はいう。

「その先をどうしてつづけないの」と初村朱実。「煙だけならよろしけど、火がでますよってな。□癖を途中で止める手はないわ」

「王女さまにはどうやら心残りがあらせられるぞ。番匠さん」

と、三十九歳の男、

「花江をからかうのは止めろ。そんなつもりならみんな帰ってくれ。……」

朝来五一はもつと長くいおうとしたが、〈下宿人〉の作者の声に掻き消された。

「花江の純粹さをおれは愛するよ。それでいいじゃないか。今日から朝来と地下天使の新しい生活が始まるんだ」

その声を目差して、テントの投げつけた紙コップは、自転車灯の明かりいっぱい、ウイスキーの水滴を振撒きながら、一旦中空に停止すると射落されたように落下した。

「裏切者がいくら恰好つけたって、どうにもなるもんか。純粹さをおれは愛するだって、おけつが笑うよ。どうせ消えちまうんだったら、さつさと消えな。……そうそう、挨拶をもうひとつ忘れてた。ノーマン・メイラーによろしくね」

「おれが裏切者ならあんたは何だい。勿体ぶった身振りをしていても、単なるアル中じゃないのか」

「本音がでしたね、メイラーさん」

最も効果のある文句を探すために間をおくといった身振りで、テントがウイスキーの瓶に手をのばした。紙コップを差出そうとする金城花江。しかし彼女はそれを受取らず、自分の膝許に転がるひしゃげたものを拾い上げた。

「そのアル中の穴倉をグイニヴィア（ノーマン・メイラー作『バーバリの岸辺』に登場する女主人公）だとよだれを垂らしながら賞めまわしたのは、どこのどいつだい。よう、ルーミング・ハウス（下宿屋）の兄さんよ。……」

「お得意の台詞だからな、あんたの。ルーミング・ハウスとさえいえばいいと思っていやがる」

「そらすんじゃないよ。あたしはグイニヴィアの穴倉を賞めた話をしてるんだよ。万引きした靴に